

〈非識字者を含むセンター修了生家庭への訪問調査報告書抄録〉

1. 調査の概要

(1) 調査対象

修了生A～Hの8名6家族を対象にした。2家族は夫婦両方を対象としている。調査の対象を選出する際、以下のことを条件とした。

- 1) 調査者のいずれかが調査対象者かその家族の担任である、または授業を担当したことがある等、面識があること。
- 2) 夫婦の識字力に大きな差がなく、日本での生活で配偶者に頼ることを期待できないこと。
- 3) 居住地の近所に親戚等助けを期待できる人がいないこと。
- 4) センター修了後およそ3年以内であること<sup>1)</sup>。

さらに、生活の便利さに地域差がみられると考えられることから首都圏、地方（東北）の双方から選出した。

(2) 調査の方法

- ・調査形態：訪問面接（面接時には、同居家族にもできるだけ同席してもらう）
- ・媒介言語：中国語  
（日本語力をみるために、質問項目と関係ない簡単な質問を日本語で行う）

- ・訪問時間：各家庭2時間程度

※補充調査：調査の結果、家族の中で2世が大きな役割を果していること、近所の人と親しく交際しているケースがあることがわかり、2世（A B、E、H家）と、親しく交際している近所の人（A B家の近所の人甲さん、E家の近所の人乙さん）を対象に、電話による補充調査を行った。

- ・調査時期：1994年1月～2月（42期）

(3) 調査内容

調査内容はセンターにおける非識字者を対象にした教育目標（Aタイプ目標構造表【資料402】参照）をもとに作成した。項目は小目標、質問内容は達成目標に則している。

補充調査では、次の事項を質問した。

1) 2世への調査

- ①中国でも今のように親を助けていましたか。
- ②現在日本で親を助けていますが、どう思っていますか。
- ③交通機関の利用、病院の利用等、親がひとりでもできるようになるように親と一緒に練習してみたことはありますか。
- ④今後、家から独立したり仕事をしたりして今のように親を助けることができなくなった場合、どうしようと考えていますか。

2) 近所の人への調査

- ①調査対象者と交際するようになったきっかけは何ですか。
- ②行き来する頻度はどのくらいですか。また、どんな付き合いがありますか。（例

：買い物に行く。一緒に食事をする)

③どの程度意思疎通ができますか。

④交際上、日中の違いからくるトラブルは何かありましたか。

⑤調査対象者との交際について率直に感想を聞かせてください。

## 2. データ分析結果のまとめ

実際の生活において、生活に必要なこと（目標構造表の「中目標1」に相当する事項）をひとりで行わなければならない、周りから何の援助も得ることができず日常生活に困難がある、というケースはなかった。2世がいれば2世が代わって行っており、いなければ自立指導員等の公的な援助がある等、周囲の何らかの援助を得ていた。

センター修了後各地に定着すると、生活に必要なことについてまず自立指導員から指導があり、数回の指導で2世が覚えることができるとその手続きに関しては2世が中心となっていた。銀行や社会福祉手続き等の公の手続きで煩雑なものに関しては、2世がいる家庭では2世がしている。その他、自立センターへの通学や買い物、回覧板の処理、自立指導員との連絡、病院への付き添いにいたるまで2世が助けているケースもあった。このように一家は2世に頼っているが、このことについて2世自身は特に負担に感じていなかった。

一方、生活の一部ではあるが、自力でこなしているケースもあった。2世がいないケースでは、他のケースで2世が行っていることでも自力でこなしていた。また、2世が仕事をしている等時間的に余裕がないケースでは例えば銀行の振り込み等、することを限定して自力で行っていた。2世がいない、2世が仕事をしている等、自力でしなければならない状況になり、必要に迫られると自力でできるようになっている。漢字が読めないことが影響し練習をしても限界があるものもあるだろうし、長期の練習を必要とするものもあるだろう。しかし、周囲が全てを代行するのではなく、本人が自力で行うものを限定して練習していく教育的配慮があれば、その範囲内でできるようになるのではないだろうか。

## 〈非識字者を含むセンター修了生家庭への訪問調査報告書抄録〉

### 1. 調査の概要

#### (1) 調査対象

修了生A～Hの8名6家族を対象にした。2家族は夫婦両方を対象としている。調査の対象を選出する際、以下のことを条件とした。

- 1) 調査者のいずれかが調査対象者かその家族の担任である、または授業を担当したことがある等、面識があること。
- 2) 夫婦の識字力に大きな差がなく、日本での生活で配偶者に頼ることを期待できないこと。
- 3) 居住地の近所に親戚等助けを期待できる人がいないこと。
- 4) センター修了後およそ3年以内であること<sup>1)</sup>。

さらに、生活の便利さに地域差がみられると考えられることから首都圏、地方（東北）の双方から選出した。

#### (2) 調査の方法

- ・調査形態：訪問面接（面接時には、同居家族にもできるだけ同席してもらう）
- ・媒介言語：中国語  
（日本語力をみるために、質問項目と関係ない簡単な質問を日本語で行う）
- ・訪問時間：各家庭2時間程度
- ※補充調査：調査の結果、家族の中で2世が大きな役割を果していること、近所の人と親しく交際しているケースがあることがわかり、2世（A B、E、H家）と、親しく交際している近所の人（A B家の近所の人甲さん、E家の近所の人乙さん）を対象に、電話による補充調査を行った。
- ・調査時期：1994年1月～2月（42期）

#### (3) 調査内容

調査内容はセンターにおける非識字者を対象にした教育目標（Aタイプ目標構造表【資料402】参照）をもとに作成した。項目は小目標、質問内容は達成目標に則している。

補充調査では、次の事項を質問した。

##### 1) 2世への調査

- ①中国でも今のように親を助けていましたか。
- ②現在日本で親を助けていますが、どう思っていますか。
- ③交通機関の利用、病院の利用等、親がひとりでもできるようになるように親と一緒に練習してみたことはありますか。
- ④今後、家から独立したり仕事をしたりして今のように親を助けることができなくなった場合、どうしようと考えていますか。

##### 2) 近所の人への調査

- ①調査対象者と交際するようになったきっかけは何ですか。
- ②行き来する頻度はどのくらいですか。また、どんな付き合いがありますか。（例

：買い物に行く。一緒に食事をする)

③どの程度意思疎通ができますか。

④交際上、日中の違いからくるトラブルは何かありましたか。

⑤調査対象者との交際について率直に感想を聞かせてください。

## 2. データ分析結果のまとめ

実際の生活において、生活に必要なこと（目標構造表の「中目標1」に相当する事項）をひとりで行わなければならない、周りから何の援助も得ることができず日常生活に困難がある、というケースはなかった。2世がいれば2世が代わって行っており、いなければ自立指導員等の公的な援助がある等、周囲の何らかの援助を得ていた。

センター修了後各地に定着すると、生活に必要なことについてまず自立指導員から指導があり、数回の指導で2世が覚えることができるとその手続きに関しては2世が中心となっていた。銀行や社会福祉手続き等の公の手続きで煩雑なものに関しては、2世がいる家庭では2世がしている。その他、自立センターへの通学や買い物、回覧板の処理、自立指導員との連絡、病院への付き添いにいたるまで2世が助けているケースもあった。このように一家は2世に頼っているが、このことについて2世自身は特に負担に感じていなかった。

一方、生活の一部ではあるが、自力でこなしているケースもあった。2世がいないケースでは、他のケースで2世が行っていることでも自力でこなしていた。また、2世が仕事をしている等時間的に余裕がないケースでは例えば銀行の振り込み等、することを限定して自力で行っていた。2世がいない、2世が仕事をしている等、自力でしなければならない状況になり、必要に迫られると自力でできるようになっている。漢字が読めないことが影響し練習をしても限界があるものもあるだろうし、長期の練習を必要とするものもあるだろう。しかし、周囲が全てを代行するのではなく、本人が自力で行うものを限定して練習していく教育的配慮があれば、その範囲内でできるようになるのではないだろうか。